

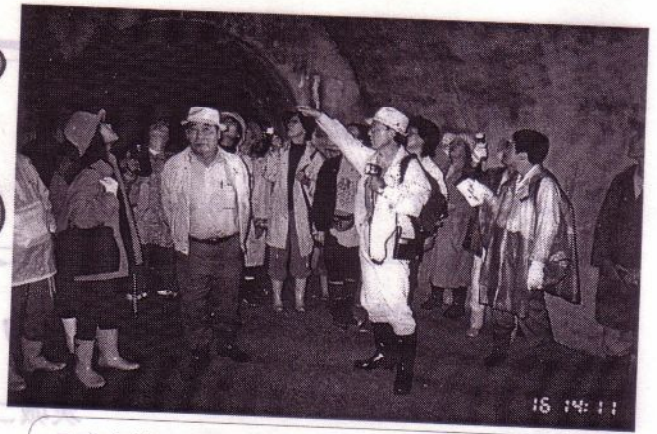


土浦平和の会

ニュースNO・97 2000年7月2

2000年 平和の旅 in 鎌倉・横須賀・横浜 その2

土浦平和の会会員 荻原 優子



日吉台地下壕にて寺田さんの説明を聞く一行

私が日本の各地に軍用地下壕が残存していることを知ったのは、松代大本営の保存運動に出会って以来のことです。日吉台地下壕のことも言葉の上では知っていましたが、今回の平和の旅は、連合艦隊司令部が使用していた部分を見学できるという滅多にない機会でした。

地下壕は慶応キャンパス内だけでも3カ所、263キロメートルに及び、司令部が入っていた部分は最も堅牢で完備した施設だったそうです。昭和19年9月末から敗戦まで、レイテ戦も沖縄戦も、特攻出撃も、すべてがここから指令されたという場所です。当時は重要な場所には蛍光灯が使われ、白昼の明るさだったといいますが、現在は巨大な暗闇で、懐中電灯を頼りに歩きながら、何度もゴム長靴を泥に奪われそうになりました。全体が厚いコンクリートで覆われているのですが、終戦時旧日本軍が爆破したところから浸水し、土砂も流れ込んでいます。案内していただいた範囲だけで規模の大きさは実感できました。大手町(東京)の地下鉄通路を全部歩いたくらいの距離感でした。

慶応キャンパスは、地上の校舎も地下壕も全体が海軍首脳部の砦だったのであり、戦後は長い間米軍に収められていたという、重要な戦争遺跡ではないかと改めて考えさせられました。松代大本営などと同じく、強制連行された朝鮮人たちの酷使された現場としても、後世に残さなければならぬと感じさせられました。

地下壕ではないけれど、松本の信州大学構内に一棟だけ残った「歩兵十連隊」の赤レンガ兵舎の保存が決まり、信大医学部の構想を軸として、市民団体が収集した資料や写真を展示できる部屋も整備される見通しが立ったということを最近知りました。慶応にも何らかの動きはないのだろうか、帰ってきてから資料を読み直しながら思いめぐらしています。

完

2000年平和の旅 その3 鎌倉編 コープ平和グループクックの会 堀江 正子

10月15日、16日、平和の旅に今年も参加することができました。

古の都 鎌倉。山ひだの多いこの町の光や風は、懐かしいほどに優しい表情で迎えてくれました。けれど、繰り返し血塗られた争乱の歴史を持つ鎌倉。わずか150年の鎌倉時代、数え切れない程の骨肉の戦乱。そして飢餓に襲われた人々の阿鼻叫喚。こうして訪ね歩いた径にも、どれ程の人々の血が流されたことか・・・そう思うと目眩を覚えます。

鶴岡八幡宮の朱色の鳥居は、大空を切り裂くかのような力強さです。頼朝と政子夫妻の激しさを想います。白拍子の静御前は、捕らえられ、この八幡宮で義経を想い、舞を舞ったと語られます。折しも10月15日、この場所で巫女の舞を目にする機会に恵まれ、不思議な想いになりました。

鎌倉時代生まれた多くの宗教が、弾圧を受けながらも現代に受け継がれていることを考えるとき、修羅の世の中、人々の進行の強さを感じます。

建長寺、円覚寺、東慶寺とめぐりました。山に抱かれた三山は、清楚な花が息づき、そのほの暗さは、様々な物音までも吸い込んでしまうかのようで、幽玄な空気に包まれます。円覚寺では期せずして坂本弁護士一家の眠るお墓にお参りすることが出来、悲しみと辛さを新たにしましたが、こうして訪れる機会を得たことに感謝します。同級生であった都子さんが何を願い、何を望んでいたのか・・・何を憎んでいたのか、わずかな力の自分でもその遺志を引き継ぐことが出来たら・・・と想いました。戦乱の遠い時代ばかりでなく、五十年前のことも多くの災害さえも、覆れていっている自分自身に胸を打たれさを覚えさせてくれた墓参りでした。

鎌倉の最後に訪れた大仏、小雨交じりの中、かつてはこの大仏には大仏殿として屋根があったことを想像したり・・・人身売買が横行していたという乱世。しかし、仰ぎ見る大仏の美しさに戸惑う闇を感じます。

一日鎌倉を歩き、歴史の町にとっても静謐な空気を感じるのはなぜなのでしょう。今年の夏8月6日訪れた広島の下、黙祷の時も感じた空気です。不思議な感覚です。人々の祈りなのでしょう・・・(続く)